

主 題：来る者を拒む主5

聖書箇所：マタイの福音書 19章30節－20章16節

今朝はごいっしょにマタイの福音書19章30節から20章の16節までを見て行きましょう。

私たち人間にとって「公平さ」は重要な概念であると思います。だれひとりとして、私たちにこの人生が公平であると教えることも告げることもないにもかかわらず、私たちは公平であることが当然であるかのように考えます。それゆえに、私たちは公平に扱われないと非常に激しく憤るのです。このことは努力と報いという概念に表われています。たとえば、私たちが他のだれよりも一生懸命働いたとするなら、それに見合う正当な報いが与えられるべきと考えます。私たちの生きているこの社会はそのような理解をもって進んでいます。そして、実際に私たちがより多くの報いを得ることができることこそが、私たちがどれほど一生懸命働きをするのかを決めている場合があります。報いが動機付けとなるのです。確かに、私たちはそのような公平さを考えます。けれども、これが教会の中に入って来た場合、私たちは考えなければならない問題をもちます。信徒たちも実は同じように、自分たちが受けるにふさわしい公平な報いを要求することが多々あります。私たちが一生懸命仕事をするなら、神が私たちに豊かに報いてくださるに違いないという考えを持つ場合があります。けれども、このような概念が私たちの教会生活の中心になってしまうなら、そこには危険が生まれて来るのです。クリスチャンは主から何かを豊かに与えられるために働きを為すという、このような考え方が蔓延し、人々の中に中心的な動機として置かれてしまうなら、神に対する働きは単なる個人的な利益を追求する手段でしかなくなります。それだけでなく、人々はお互いのことを比べようになります。あの人は私よりも働きが少ないのに、こんなにもたくさんのもので得ている、不公平ではないか？また、私はあの人たちよりもこんなにも多くの働きをしているから、このように豊かになっているのですと、高慢な思いが生まれて来るかもしれません。逆に、こんなに多くの働きをしているのに、私には何一つ報いが与えられないと落胆して働きを止めてしまうことが起こるかもしれません。実際に、このような思いをもたれる方は、私たちが想像する以上に多いのではないのでしょうか？

弟子たちがイエスにこのような質問をしました。ペテロが代表して言うのですが、「**ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるのでしょうか。**」、私たちの報いはいったいどのようなものですか？と弟子たちはイエスに聞いているのです。彼らは金持ちの青年ができなかったことをしました。彼らは確かに自分たちの仕事を捨て家族を捨てありとあらゆるものを捨ててイエスに従って行きました。そして、前回見たように、彼らはその報いが何かを知りたかったのです。イエスはこの質問に対して非常に優しく、詳しく説明されました。今与えられる報いを教え、未来において得ることができる報いが何かを教え、そして、永遠においてこのようにすべてを捨ててイエスに従った者が受ける報いを教えたのです。けれども、これらのことを弟子たちに告げた後、イエスはどうしても弟子たちに伝えなければならないこと、彼らに思い起こさせなければならないことがあったのです。しかも、それは非常に明確で分かり易く、人々の印象に残る一つのたとえ話をもって、決して、そのことを忘れることがないようにとイエスは語るのです。

なぜ、私たちは神に仕えるのでしょうか？より多くの報いを受けたいからですか？いったい、私たちが神に仕えるその動機は何でしょう？イエスはここでこれまで私たちが見て来たマタイ19章、金持ちの青年のことから始まったその会話の中で、最後にこのことを話されるのです。ここで、イエスは私たちが覚えておかなければならない非常に大切な事柄を教えています。そこで私たちは仕える動機について、いや、永遠のいのちとは何なのか、なぜ、それが与えられるのかという大切な問いに明確な答えが出されていることを見るのです。この箇所を見るに当たって、私は皆さんにお願いします。それは皆さんがご自身の心の中を吟味して下さって、何のために神に仕えるのかを探っていただきたいのです。

イエスはここで真のクリスチャンに対するたとえ話をされます。しかも、それは一つの箴言、金言、ことわざ、それによって始まりそれによって終わるものです。弟子たちとのこの一連の会話を終えるに当たって、イエスはこの金言を用いて私たちに大切なことを教えようとするのです。この金言は会話のまとめであるとともに、たとえ話の導入になっています。そして、20：16までのところで、イエスは19：1から始まった一連の文脈を終えるのです。たとえ話は論理的にアウトラインを作って区分して話すことは難しいので、話を順に見て行きましょう。19：30－20：16を通して、私たちは三つの事柄を考えたいと思います。1. 金言（19：30）、2. たとえ話、3. 原則です。救いに関して、私たちが救われた者として何を考えるべきなのかを、イエスはここから弟子たちに、そして、今の

私たちに大切なことを教えようしているのです。19:23から読みます。

「19:23 それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国にはいるのはむずかしいことです。:24 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」:25 弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」:26 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」:27 そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるのでしょうか。」:28 そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。:29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。:30 ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。」

20:1 天の御国は、自分のぶどう園で働く労働者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。:2 彼は、労働者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。:3 それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしないでいた。:4 そこで、彼は那些人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』:5 彼らは出て行った。それからまた、十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。:6 また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。』:7 彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』:8 こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。『労働者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。』:9 そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつもらった。:10 最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。:11 そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて、:12 言った。『この最後の連中は一時間しか働かなかったのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。』:13 しかし、彼はそのひとりに答えて言った。『私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。:14 自分の分を取って帰りなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。:15 自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。』:16 このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」

☆私たちはなぜ、主に仕えるのか？

1. 金言

19:30「ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。」、クリスチャンなら一度は耳にされたたとえ話ではないでしょうか？確かに、すばらしいイエスの教えであり、非常にまとまった短いことばで表わされている金言、ことわざです。けれども、これをただ耳にするだけではまるでなぞなぞのように思えて仕方ありません。「先の者があとになり、あとの者が先になる」とはどういうことでしょうか？確かに、これは耳にただけでは非常に分かりにくい謎解きのようなものであるかもしれませんが、私たちはその答えを簡単にこの文脈の中に見出すことができます。私たちがこの後見て行くように、このイエスのことばが伝えていることは「神の御国における平等性」です。それが要点です。

そして、非常に親切にイエスはこのたとえ話を終えた後に、もう一度、このことばを繰り返して、今度は順番が逆ですが、20:16「このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」と、ここで言わんとしていることをはっきりと表わしています。多くの人たちはここで「最初、先の者」とは、この地上において非常に優遇されている裕福な人たちを指すのではないかと考えます。それはまるで、この前に出て来た若い金持ちの役人のような人物です。そして、「最後の、あとの者」と呼ばれている者たちは、この世では虐げられていたけれども、弟子たちのようにすべてを捨ててキリストに従って行った者たちのことを表わしていると考えます。確かに、このような考え方をすることが出来ない訳ではありません。そのようにしても全くおかしいというものではないのかもしれませんが、少なくとも、このマタイの福音書の文脈の中でイエスが言わんとしていることはそれではありません。そのことを私たちはこのたとえ話しを見て行く中で、はっきりと示されるのです。

ここで言わんとしていることは、明らかにこの文脈に深い関係があります。19:30と20:16で同じ概念が繰り返されていることは、その中に語られていることをサンドイッチのように挟み込むことによって言わんとしていることが明確に分かるようにしているのです。では、いったいここで言わんとしていることは何でしょうか？それは皆さんが、最初の者があとになり、あとの者が最初になるということを想像することが出来るなら解決します。でも、どうすれば最初があとになり、あとが最初になると思えますか？私たちが多分弱点として持っていること、いかに頭が固いかというだけでなく、このことばを聞いた時、最初の人を追いつかれて一番最後になるということを想像されるかもしれません。そうなら、あとの者が最初になるでしょう。そのように考えることは確かに可能ですが、問題は文脈で

す。この後から見て行きますが、これ以外にどのように考えることができるのかを想像しなければいけません。徒競走、レース、何らかのレースを考えて頂いて、そしてゴール地点に自分を置いてください。抜くではありません。抜いてしまうとこのたとえ話が通用しなくなります。抜かないで一番が最後で、最後が一番になるにはどうしたらいいでしょう？全員が横一線に入って来たとしましょう。全員が全くの同タイムでゴールに入ったとします。一番はだれですか？一番は全員です。一番最後はだれですか？全員です。先の者が最後になって、最後の者が最初になっています。みんなが横一列に並んでいるからです。イエスがここで言わんとしていることはまさにそれです。すべての人が同じものを得るということです。それがイエスがここでこのことばを通して伝えようとしていたことです。けれども、なぜ、イエスはこのようなことを言われたのでしょうか？それが弟子たちや私たちにとってどのような意味合いをもっているのでしょうか？そのことは私たちがこの例えを見て行く時に明確に示されるのです。

2. たとえ

このたとえ話は非常に分かり易く、多くの説明を必要としないものです。たとえ話というのは往々にしてそうです。日常的な事柄を用いて、言わんとすることをより分かり易く説明するためのものです。私たちがたとえ話を理解しようとする時に気をつけなければいけないことは、たとえ話は一つのポイントを説明するために話が構成されているということです。私たちはその話の中のたくさんの事柄の詳細を細かく見て行くのは難しいことですし、また、それはしてはいけないことでもあります。たとえ話の全体を通して何が言われているのか、理解する上でそのことを考えなければいけないのです。

では、この20章のたとえ話でイエスが言わんとしていることはいったい何でしょう？20:1にその説明がされています。「**天の御国は、……のようなものです。**」と、13章で多く語られたたとえ話と同じように、ここでも「**天の御国は、……のようなものです。**」と言って話を始めるのです。これがイエスが伝えようとしていたことです。このたとえ話を通してイエスは天の御国がどのようなところかを私たちに教えようとするのです。私たちはそのことを正しく理解しなければいけません。天の御国とはどのようなところなのか、何がそこで起こるのか、そのことを私たちによく分かるようにイエスこのたとえをもって説明するのです。

実は、20:1の冒頭にここでは訳されていない大切なことばがあります。原文にはここには「それは、なぜなら、」と訳すことが出来る前置詞が付いています。何を言っているのか、実は、19:30のことばと、20章から始まるこのたとえ話には非常に密接な関係があるということを教えているのです。切り離すことができないのです。別の話をしようとしているのではないのです。イエスは「**先の者があとになり、あとの者が先になる**」ということへの説明としてこのたとえ話をしてくださっているのです。このことばをみただけで、私たちはここに書かれているたとえとイエスが語った箴言、金言との関連の深さを知ることができます。それだけでなく、先程も言ったように、これは19:30と20:16にサンドイッチされているのです。このたとえ話は非常に分かり易いもので、余り多くを説明する必要はないと思います。ここでは天の御国というのには「**自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなもの**」だと言います。ここで、私たちにこの主人がなぜ労務者を採しに行ったのか、その理由について一切知らされていません。けれども、この話を聞いていた人々にはそのことは明らかだったのです。もしかすると、この労務者はぶどう園を新しく開拓するために労務者が必要だったのかもしれない。春にそのようなことが行われます。また、もしかすると、夏の間にもぶどう園で実り始めたぶどうの実がより豊かにより大きく育つように、ぶどうの刈り込みをするために人手が必要だったのかもしれない。また、ひょっとすると10月に入ってイスラエルに雨期がやって来るその前に、秋に豊かに実ったこのぶどうの収穫のために、これらの人々が必要だったのかもしれない。その理由は書かれていませんが、多分そのような理由がそこにあったのでしょう。これらのすべての働きは非常に困難なものでした。大変な労働でした。なぜなら、このぶどう園は山あいにあったからです。山の斜面に作られていました。イスラエルでは、平地、盆地では穀物が盛んに栽培されていましたが、昔から山ではぶどうが栽培されていたのです。ところが山にぶどうを作ることは非常に大変な作業だったのです。なぜなら、イスラエルの山岳地帯は、非常に大きな岩があって、岩地、岩で造られた山々だからです。それゆえに、このような場所にぶどう園を築こうとするなら、人々はそこに出て行って、まず岩を全部除けなければいけません。岩を除けてそれでテラスのようなものを作って段々畑にします。段々畑のために人々は麓からぶどうが育つような土を運び、肥料を運んで、そこにぶどう園を整えて行くのです。非常に大変な作業です。たくさんの人が必要だったのでしょう。

また、夏に刈り込みをするのも大変な作業です。この砂漠地方の夏の暑い中、山の中で彼らは非常に細かい作業をしなければいけません。ぶどうの実が豊かに育つように、農夫たちは注意深く間違っただけのものを切らずに正しいものを切ることが出来るように、刈り込みをして行かなければいけないのです。それは大変な作業でした。そして、何よりも大変だったのは収穫時期です。なぜならば、この収穫時期は

秋に訪れるのですが、先程も言ったように、10月には雨が降るのです。雨が降り始めると生っているぶどうが全部腐ってしまいます。それゆえ、ぶどうが腐る前に収穫を終えないといけません。そのように時間的に切迫した中で、人々は収穫の働きをしなければいけません。ときに、この収穫の時期は実りが豊かに完熟するようになるまで、実際に9月の半ば過ぎまでかかる時があります。そうすると、収穫の期間が1～2週間しかない場合があります。それゆえに、彼らは一生懸命仕事をして、それらの収穫がすべて終わるように大変忙しい時期を過ごしたのです。何時のことか、確かには書かれていませんが、私が個人的に想像するのはこの最後の時ではなかったのかなと思います。9月の半ばから終わりにかけて、非常に大きな広い農園において農夫が必要になっていた。そこでこの主人は朝早く出て行って労務者を雇ったのです。

この話を聞いていた人たちはこのことをよく知っていました。彼らには非常に分かりやすい話だったのです。一日は日の出とともに朝の6時に始まりました。そして、労働時間は日が暮れるまで続きました。朝6時から夕方6時まで一日12時間の労働でした。この主人は朝早く市場にやって来て、そして、労務者たちを見つけるのです。この日雇いの労務者たちは、通常、社会的、経済的な状況の中にあって最も低い位置にいる人たちだと考えられていました。彼らは一般的に特別な技術もなく、実際に雇用されておらず、だれかがやって来て自分たちにその日の仕事を与えてくれるのを待つことしかできなかった人たちでした。彼らは仕事をしなければその日だけでなく、次の日の食事も、また、家族の生活費も賄うができないような人たちでした。それゆえに、多くの状況において、彼らは奴隷よりも社会的にも経済的にも低い地位にいたと考えることが出来ます。なぜならば、奴隷は主人の下で仕事を強いられたかもしれませんが、彼らには泊まる家も食べる食事も主人のケアのもとで与えられていたからです。彼らは次の日の心配をする必要はありませんでした。けれども、このような日雇いの労働者たちはその心配が大いにあったのです。

このような人たちを守るために、神は実際に律法の中で、彼らのために賃金をきちんと払わなければいけないという命令を為しています。レビ記19：13や申命記24：14－15にはそのことがはっきりと命令として記されています。「**あなたの隣人をしいたげてはならない。かすめてはならない。日雇人の賃金を朝まで、あなたのもとにとどめていてはならない。**」（レビ19：13）。一日働きをしたその日の賃金はその日の内に払わなければいけないと主が命じられておられるのです。これはまさにこのような人たちを守るための基準でした。これもまた、この話を聞いていた人たちには非常に良く分かること、よく知っていた親しみのあることでした。この農園の主人は労務者たちを見つけ、そして、彼らと一つの約束をしました。「あなたたちはどうぞ私のぶどう園に来て仕事をしてください。一日の終わりに私があなたに与える報酬は1デナリです。」と。これを聞いた労務者たちは非常に喜びに満ちあふれたことでしょう。今日は何とすごい一日だ！と思ったでしょう。なぜなら、この1デナリという賃金は、一般的なローマの兵士たちが一日の日当として割り当てられる額だったのです。それゆえに、このような日雇いの労務者たちが一日1デナリを受けることはほとんどありませんでした。非常に高額な一日の日給だったのです。彼らは喜び勇んでぶどう園へと出て行きました。そして、朝の6時から夕方6時まで12時間一生懸命働いた訳です。

次に、何が起こるのか、3節にあるように「**それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしないでいた。**」、この「**何もしないでいた**」ということばを見ると、私たちは彼らが怠け者であったかのように思うかもしれませんが、ここで言っているのはそのようなことではありません。彼らは仕事が欲しくて市場で待っていたのです。仕事をしなければいけないということを理解していたゆえに、次の日の食事もままならないということを知っていたゆえに、朝9時になっても、ひょっとしたら自分にはまだ仕事があるかもしれない、だれか雇ってくれる人が現われるのではないかとあって、そこに立って待っていたのです。彼らが何もしていなかったのはする仕事は何もなかったからです。彼らはただだれかがやって来るのを熱心に待っていたのです。だから、立っていたのです。怠けるのなら家に居ればいいのです。でも、彼らは市場にやって来て雇ってくれる主人が現われるのを待っていたのです。なぜ、彼らには仕事がなかったのでしょうか？その理由は書かれていません。ひょっとすると、朝の6時に間に合わないような遠い所から来ていたのかもしれない。ひょっとするともう6時の時点で他の仕事をもらって3時間かからずその仕事が終わってしまって、まだ必要があるからと市場に残って、そこで立っていたのかもしれませんが。ひょっとすると、朝6時からズーと居たにもかかわらず、だれも彼らのことを雇ってくれなかったかもしれません。その理由は分かりませんが、この主人は彼らを見つけて彼らにこう言うのです。4節『**あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。**』と、非常に興味深いことがここに記されています。それはこの主人は朝9時から働きをする者たちに対して具体的な賃金の約束をしていないことです。最初は1デナリを上げますと約束したのですが、9時に雇う人たちに対しては「**相当のものを上げるから。**」としか言わなかったのです。皆さん、考えてみてください。

彼らはこの主人のことばを信用したのです。いくらもらえるか分からないけれど明日の生活のために仕事が必要だったのです。必要があるから、だから、彼らはどれほどの賃金でも私は喜んでそこに行こうと思っていたのです。それだけでありません。なぜなら、よく聞いてください、考えてみてください皆さん、想像してみてください。浜寺公園駅に皆さんが日雇いの労務者として主人が来るのを朝6時から並んで待っていたとしましょう。そして、そこにこの主人がやって来て皆さんの一部の人たちにこう言うのです。「実は今日、私の会社で20人ほど人が必要なのでこの中から20人雇いたい。どなたかいらっしやいませんか？ちなみの今日の日給は一日10万円です。」と。20人連れて行かれました。残った人たちはどうですか？そのことが話題になりませんか？「いやー、実は今朝一人の主人がやって来て、どここの会社で日給10万円で雇われました。いいなあー、あの人たち、羨ましいなあ、すごい主人だな…」と、間違いなくこの場ではそのようなことが起こっていたでしょう。そのように考えて当然だろうと思います。作者はこのことを記していませんが、少なくとも、この主人に9時に雇われた人たちは、主人の語ることばを信用し、彼が恵み深く人々に非常にすばらしい給料を与える人だということを信頼し、そのことに希望をおいて「分かりました。今から仕事に行きます。」と言って9時に出て行ったのです。彼は9時間働きました。

この後、非常に不思議なことが起こります。5節にこのように書いてあります。「**彼らは出て行った。それからまた、十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。**」と、実は同じことが起こったのです。9時に主人は出て行っただけでなく、12時にも午後の3時にも同じようにして出て行くのです。そうすると市場にはまだその時点でも、12時にも3時にも仕事を求めて何人か立っているのです。その人たちに対してもこの主人はきっと同じことばを言ったのでしょう。『**あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。**』と。彼らはそのことばを信頼して9時に出て行った者たちと同じようにぶどう園に行って仕事をしました。ある者は6時間、ある者は3時間仕事をしました。そして、考えられないことが起こります。6節「**また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。』**」、午後5時、私たちにはなぜこの主人がこの時間にまで人を雇いに行かなければいけなかったのか、その理由は書かれていないので分かりませんが、もしかすると、最後にどうしてもやらなければいけない仕事があったのかもしれませんが。様々な事柄において、この主人はいろいろなことを見て行く中で、この人たちを雇いたいと考えたのかもしれませんが。それは分かりませんが、彼は5時に出て行って、5時にまだそこに立っている人たちがいるのを見て『**なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。**』と言います。彼らはこう答えました。7節『**だれも雇ってくれないからです。**』、彼らはだれかが来るのをずっと待っていたのです。この主人が来るのを見ていたのでしょうか。9時に来て12時に来て3時に来たけれど、でも、自分には声がかからなかったのです。ひょっとしたら市場の一番前にいなかったかもしれない。主人が来た時にそこにまだ来ていなかったのかもしれませんが。

けれども、何らかの理由で、彼らはそこにいなかった、だれも雇ってくれる人がいないまま、午後の5時までいたのです。なぜ、そのままそこにいたのでしょうか？不思議に思いませんか？なぜなら、一日の仕事は6時に終わるからです。いったい、どの主人がやって来て1時間だけ自分を雇ってくれるのでしょうか？彼らはそこに立ったままでいたのです。諦めて帰ってしまうのではなく、主人がやって来るのをそこに立って待っていたのです。だれかが来て自分を雇ってくれるのを。なぜですか？たとえわずかな額でも、収入を得ることがなかったら自分の家族はどうなるか？彼らは切羽詰まって自分たちの必要が分かっていたゆえに、諦めないで市場に立ってその可能性にかけたのです。そこにやって来た主人はこう言います。『**あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。**』と。賃金の約束は一切ありません。彼らは何が与えられるのか分からないまま、ぶどう園に行って残りの1時間だけ仕事をするのです。

そして、いよいよ夕方がやって来ます。仕事が終わったのです。この主人は律法に記されている通りに日雇いの労務者たちに賃金を支払い始めます。そして、このように言うのです。8節「**こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。『労務者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。』**」と、私たちが最初に見た金言が出て来ました。最初の者があとになってあとの者が最初になっています。最初に、最後に雇われた者たちが現われました。彼らは1時間しか働かなかった。ただ単に、一番短い時間しか働かなかっただけではなく、実は、彼らは最も居心地のいい労働環境、状況の中で仕事をしたのです。夏の終わりのイスラエル、砂漠の気候がどんなものか分かりませんが、日中はものすごく暑いのです。けれども朝晩はもう一枚上に何か着なければ寒いと思うくらい涼しくなります。ちょうど地中海から東の風が入って、イスラエルのその領域の暑い空気を押し流して冷たい空気が入って来るからです。午後5時に働き始めた彼らは暑い中ではなく、涼しくて比較的作業のし易い中で1時間しか働かなかったのです。この最後に雇われた労務者たちは、余り多くの賃金は期待していなかったでしょう。約束もされていなかったし、わずか1時間で非常に楽な環

境の中でしか仕事をしなかった。どんなに得ても、最初の人たちに約束された1デナリの12分の1か
いや多分それよりも少ない額だろうと、そのように考えていたかもしれません。けれども、彼らが受け
取った額はいくらだったと思いますか？それぞれ1デナリずつもらったというのです。皆さん想像して
みてください。どのような状況でこの賃金が与えられたのか分かりませんが、私が勝手に想像するのは、
ぶどう園の端に作業小屋、管理小屋があって、そこに監督がいるのです。労務者はその小屋に順番に呼
び込まれます。最後にやって来た5時に雇われた人たちが中に入って、そして、中から出て来た時、彼
らは満面の笑みを浮かべる訳です。たった1時間しか働かなかったのに1デナリももらったと言って…。

そのことを横で見ていた最初に雇われた人たちはもっと喜んだでしょう。「しめた！一日1デナリと思
ったけれど、実は日給は12デナリだったのだ。」と。1週間分の賃金、これが買えるあれが買えると思
ったかもしれません。しばらく仕事をしなくていいかもしれないと、そのような期待を胸に抱いた人た
ちは、最後に雇われた者たちから順番に賃金が払われて行くのを見ていて、そして、いよいよ自分た
ちの順番になりました。自分たちは12時間も過酷な労働条件の中一生懸命仕事をした、だから、1時間
しか働かなかった人に比べて、もっともらえるに違いないと思っていたのです。ところが、彼らもやは
り1デナリずつしかもらえませんでした。彼らは「不公平だ！」と言ったのです。不公平、たしかに人間
的な観点から見れば、彼らのつぶやきは理解できます。私ももしこの中にいたら「いやー、それはないで
はないですか。一生懸命12時間も働きましたよ、それなのに、どうして1時間の人と同じなのですか？
公平ではないです！」と言うでしょう。

私たちが覚えておかなければいけないこと、それはイエスがここでたとえ話をもって伝えようとして
いる要点は「労働基準法」ではないということです。イエスが教えようとしていることは、天の御国は
どのようなものなのかということです。人間的な観点から見ると、私たちは確かに最初に雇われた労
働者たちに同情します。悪い環境の中で彼らは一生懸命働きました。彼らは何度も何度も山を上り下り
して一日中仕事を続けたのです。彼らはこの焼けるような暑さの中で、ここでは「かぜ」と訳すことば
が使われているのですが、砂漠の方から吹いてくる西風が彼らを焼くのです。このような状況の中で一
日中汗を流しながら、仕事をするとどうなるか、のどが焼けてからからになって来ます。そして、唇は
乾燥して割れて来ます。そのような状況が記されています。「苛酷な環境の中で私たちは12時間も一生
懸命働いたではありませんか！それなのにどうして私たちは彼らと同じなのですか？」と彼らは言うの
です。

それに対して主人のすばらしい回答が為されます。13節を見てください。『**私はあなたに何も不当なこ
とはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。**』と、これが主人の回答です。この
主人のことばには「友よ」という呼びかけのことばがあるのですが省かれています。なぜ、それをここで
省いたのか分かりませんが、このことばがあることは非常に重要なことです。なぜなら、ここで主人が
不平を言っている労務者たちに対して「さばきの宣告」をしているのではないということを確認する
ことができるからです。このことばは「親友」ということばではありませんが、非常に親しみのこも
った呼びかけです。そのような思いを込めてこの主人は彼らに言うのです。『**私はあなたに何も不当なことは
していない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。**』と。「私はあなたを騙してはいない、私
はずるいことをしていません。事実、私はあなたに約束した非常に豊かな賃金を実際に払っているでは
ありませんか。」と。この主人は何も悪いことをしていませんでした。むしろ、彼は自分が支払うと約
束した豊かな報酬を誠実に守ったのです。それでこの主人は14節「**自分の分を取って帰ちなさい。**」と
言っています。

ここで一つ明確にしなければいけません。それはこの箇所、このたとえ話の流れの中から、私たちは
不平をもらす労務者たちに御国から追い出される姿を見ることはできません。もし、最初に言った様に、
「**先の者があとになり、あとの者が先になる**」というその「**先の者**」が金持ちの青年のような者であるとする
なら、彼は救われていないから天の御国に入ることはない訳です。もし、その性質で現わそうとするなら、
この主人は労務者たちに対して「なぜ、私のことをそのように言うのだ。ここから出て行って暗や
みに行き歯ぎしりして泣きなさい。」と言ってもおかしくありません。そのようなことはここには書か
れていないのです。このぶどう園で仕事をした人たちはみな同じように、同じ賃金を受けたのです。同
じ報酬、等しい報いを受けたのです。それゆえに、私たちはこの世において、先に来た人たちが御国に
入れないとか、御国において最下層になるなどということを見ることはできません。みな同じものをも
らっているからです。

続けてこの主人のことばを見てください。主人はこう言います。14節「**自分の分を取って帰ちなさい。
ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。**」、何とすごいことがここに記され
ているのでしょうか？いったい何が起こったのでしょうか？簡単に言えば、主人は恵み深かったということ

です。この主人はぶどう園で仕事をしたすべての労務者に、彼がこの日雇ったすべての人に1デナリずつ上げたいと思ったのです。なぜならば、この日このぶどう園にやって来て仕事をした人たちは、みな同じ必要を持っていたからです。みんな仕事がなかったのです。定職がなかったのです。みんな明日の生活費がなかったのです。その必要を知っていたこの主人は、すべての労務者に対して同じようにその必要を満たしたいと願ったゆえに、朝6時から働いた者も9時から働いた者も12時から働いた者も、3時から働いた者も5時から働いた者にさえも、1デナリずつ上げたい、上げようと思ったのです。

15節に記されているこの質問はここでの問題を明確に表わしています。「**自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。』**」。なぜ、朝6時に来た者たちは不満を漏らしたのでしょうか？主人が不公平だったからでしょうか？この主人はそうではありません。問題はどこにあったのでしょうか？それは主人の恵み深さと労務者たちのねたまみです。彼らは自分たちよりも働きをしなかった人たちが自分たちと同じだけの報酬を得ることが許されなかったのです。この質問をもってイエスはこのたとえ話を終えられ、もう一度、ことわざを入れます。16節「**このように、あとの者が先になり、先の者があとになるのです。」**と。全員同じ1デナリずつの報いを受けませんでしたか？雇われた者でだれ一人としてこの報いを受けなかった者はいなかったのです。これがこのたとえ話の要点です。この金言のポイントです。神の御国に属するすべての人はみな同じ報いを受けるということです。そして、その報いとは「永遠のいのち」です。どれだけ長い間働きをしたのか、どれだけ多くの仕事をこなしたのか、それに基づいて報いが与えられるのではなく、神の恵みに基づいて報いが与えられるのです。神の所有物であるこの報い、永遠のいのちも神のもので、神はいのちの源だからです。それが与えられるのは、人々がこの報いを得るにふさわしい働きを為したからでも、彼が努力してそれを得るに至ったからでもありません。彼らがそれを得るのはただ神が恵み深いからです。

このたとえ話は非常に鮮明な衝撃的なたとえ話です。永遠の報いが与えられる際にあるこの神の恵み、そして、キリストに従い、キリストのために働きを為す者に対する同等の平等な報いをこのたとえ話は明確にします。

3. 原則

では、いったい私たちはここからどのような原則を見出すことができるのでしょうか？私たちはこれまで金言、そしてたとえを見ました。そこにはどのような原則があるのでしょうか？ここから多くの原則を見出すことが出来ます。マッカーサー先生は少なくともここに六つの原則を見出すことが出来ると言います。

1) 神の救いにおける、救いの招きに関する神の主権性

神こそが私たちを求め、私たちを愛してくださった方である。ちょうど、この主人が最初に市場に行って、そこで自分のぶどう園で働く人たちを招いたように雇ったように…。救いにおいて神がまず行動されました。神に主権があるからです。

2) 神が救いの条件を定める

いったい、どのようにすれば私たちが救いを得ることができるのかということに関して、それを定めることができるのは神だけです。丁度、朝の6時に雇う者たちに対して、この主人が一日1デナリの約束をしようと言ったように。9時から雇う者に相当のものを与えると言ったように。その条件を定めるのは主人である神です。私たちが神のもとに行って、「すみませんが、これこれこのようなことをしたから救いをください。」と言うことが出来るものではないのです。私たちが神と交渉してその条件を変えることが出来るものでもないのです。

3) 神の継続的な招き

丁度、農園の主人が続けて3時間ごとに市場にやって来たように、神は私たちに対して継続的にその生涯の続く限り招き続けてくださっているのです。20代、30代でも40代でも70代でも80代でも、いや100歳になってもこのいのちが終わるまで、神は招きに来てくださるのです。

4) 神の救いにおけるあわれみ

自分の必要に気付いている者たちに対する神のあわれみの深さは測り知ることができません。いったいだれが後1時間しかない夕方に仕事をさせるために雇って、その人に一日働いた人と同じだけの賃金を与えるでしょうか？なぜ、この主人は1時間しか働かなかった者にも「**同じだけ上げたい**」と思ったのでしょうか？彼らは必要に気付いてずっと待っていたからです。ちなみに、雇わなかった人、市場に来なかった人、また、途中で諦めて帰って行った人たちもいます。でも、必要に気付いてたとえ何時になっても希望をもって、どうぞ、だれか来てくださいますと願い求めている人に対して、神はあわれみ深く、どの時点にあっても、同じ報いを与えるために手を伸ばしてくださるのです。

5) 神の救いにおける誠実さ

神は約束されたものを確かに与えられます。一日の賃金にしてははるかに多いものを、主人は労働者たちに備えました。同じように、神は私たちが受けるにふさわしくないすばらしいものを私たちに備えてくださり、それを約束どおり与えてくださるのです。たとえ、いつ私たちが信じたとしても…。このようなすべての原則は非常に重要なものです。私たちはよく覚えておかなければいけません。

けれども、もう一つ、非常に重要な事柄を皆さんに告げてこのメッセージを閉じたいと思います。

6) 神の恵み

皆さんの中にもきっと、一番長い時間働いた労働者たちと同じように「それは不公平だ」と言われる方がいらっしゃるかもしれません。そして、「私は公平が欲しい。私にふさわしいものを私に与えてください。」と、皆さんがもしそのように言われるならよく気をつけてください。皆さんが神から受けるにふさわしい最も公平なものとは何でしょう？それは地獄における永遠のさばきです。それ以外にふさわしいものは何もありません。私たちの全生涯において最も公平な報いは永遠の地獄での永遠の苦しみです。だから気をつけてください。皆さんは間違いなく公平なものは欲しくないはずで。

レオン・モリスという神学者はこのように言います。「救いは常に神の恵みのみわざである。神がご自身の道理に基づいて私たちに接してくださるのではないというその事実は、罪人が常に心から感謝しなければならない事実である。生まれながらの人間は、報いというものは自分の仕事の成果に基づいて、それに対して与えられる対価であると考えられるかもしれない。イエスがここで示しておられることは、神は私たちの成果に基づいて私たちと接するのではなく、ご自身の恵みに基づいて私たちと接するのだということ。神の愛は、いやそのすべては、罪人に対して溢れんばかりに注がれていて、罪人は自分たちが受けるに相応しいものをはるかに超えたすばらしいものを与えてくださる。」と。永遠のいのちは私たちがどれだけ一生懸命働くかによって備えられるものではありません。どれだけ長い間働くかでも、どれだけその働きが困難によっているかでもありません。すべては神の恵みに基づいて、悔い改めた罪人たちに対して、彼らが自らを捨て自分の十字架を負ってキリストに従って行く時に備えられるものです。

これまですでに見て来たように、救いは私たちには不可能ではないですか？自分たちの力で得ることができないものを神は可能にしてくださったのです。私たちはそのことを明確に理解しておかなければいけません。このたとえをその場で聞いていた弟子たちは、常に、いったいだれが王国の中で最も権威がある者なのかと議論していました。実際に、イエスが裏切られるその晩も、彼らはこの話に花を咲かせていました。「いったい、自分たちの中でだれが偉いのか？」と。彼らに対して、そして、今の私たちに対してイエスは、お互いを比較することを止めなさい、どれだけ自分が働きを為したのか、どれだけ長い間頑張ったのか、どれだけ困難な働きだったのかなどということと比較し合うのを止めなさいと言われるのです。なぜなら、聖書は私たちに私たちが受ける報いはみな同じだと教えているからです。

終わりに、私たちはみな同じすばらしい報いを受けます。確かに、書簡においてパウロや他の使徒たちは、私たちにはそれぞれ違う報いがあり、違う王冠があるということを言っています。イエスはここでそのことを話してはおられません。イエスはここで救いに関する話をされているのです。その文脈を私たちが取り違えてはいけませんが、ただ、違う報いがあると言ったとしても、例えば、義の冠について、だれが義の冠を受けるのでしょうか？義とされた者がみな義の冠を受けるのです。いのちの冠はどうですか？いのちの冠を受けない人がいますか？ここでイエスが問題にされていることは、すべての人が同等に神の前にいのちを得るということです。イエスは19：29で明確に言っておられます。「**また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てて者はすべて、その幾倍をも受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。**」。私たちは往々にして、自分たちの働き、そして、それに対する報いを考え過ぎます。確かに、私たちの生涯の中にはそのような報い、私たちの努力に対する報いという概念が存在します。それ自体否定するものではありませんが、私たちの天における報いを考える時、私たちはその平等性というものをしっかり理解しておかなければいけないのです。

願わくは、主のみこころなら来週は「天における個人的な報い」に関して、皆さんとごいっしょに学びたいと考えます。けれども、ここで私たちがよく覚えておかなければいけないことがあります。私たちのこの肉的な願いのゆえに、自分たちが受けるに相応しいものを「私は受けていないじゃないですか」と不満を漏らしたり、それを受けているゆえに、この地上において高慢になってしまう、そのような状況を多く見ることがあるということです。そのことに注意しなければいけません。私たちはこの神の恵みを無視して、「それは不公平です」と叫ぶようなことがないように気をつけなければいけません。報いは必ずすぐに与えられるものではありません。でも、神は必ず報いを与えてくださいます。いつですか？夕方になって支払いの時がやって来て、一日一生懸命働いた、冷たいお茶が出て来たらすばらしいかもしれない、でも、出て来なくても私たちは一生懸命働くのです。報いは必ず待っているからです。私たちは今与えられる様々な祝福を追い求める余り、永遠にあるすばらしい恵みを忘れてしまいます。私たちはそれを乗り越えなければいけません。それはもう過去のものにして、私たちはこの地上での人生を生き

て行かなければいけないのです。神は私たちにいのちを与えてくださり、私たちを生かしてくださっています。私たちに仕事がなかった時に神は私たちに仕事を与えてくださったのです。

このたとえにおいて教えられるように、私たちにいのちがなかった時に神はいのちを与えてくださり、私たちが進んで行くことが出来るようにしてくださったのです。私たちが12時間働こうとも、たとえそれが1時間だけであっても、そのように受けるにふさわしくない恵みを受けた者として、私たちは主の前に熱心に仕事を続けなければいけません。金持ちの青年の登場によって始まったこの一連の事柄、それはこの重要なレッスンをもって終わります。この一連の箇所イエスは非常に大切な「救いの教理」というものを教えてくれています。私たちは今それを見終わって、はっきりと救いは罪の認識なしには決して起こらない、罪を認めることがなければ起こらないこと、そして、すべてを捨ててキリストに従うことがなくては救いは有り得ないことを見ました。また、私たちは事実、救いは人間には不可能であるということを見ました。けれども、神は「らくだが針の穴を通るようにすることが出来る方」であると見ました。また、私たちはすべてを捨ててキリストに従う者にすばらしい報いが、今も未来も、そして永遠に与えられるという約束を知りました。そして、これらすべてが、ただただ神の恵みによるのみ起こるということです。受けるにふさわしくない者、さばかれて当然の罪人に対して、このように神からすばらしい恵みが与えられていることを知りました。永遠のいのちに関して、私たちが持っている人間的な公平さは通用しないかもしれません。私たちが永遠のいのち、救いを考える時に、私たちの努力と報いという概念は一切崩れ去ります。

救いは、恵みのゆえに信仰を通して起こります。そして、神によって召され、神の召しに正しく応える者たちはすべてこの永遠のいのちを同等に受けるのです。真のクリスチャンは主の前にへりくだって現われます。なぜなら、彼らは自分たちの罪を良く理解しているからです。真のクリスチャンは喜んでキリストに従って生きています。なぜなら、彼らが持っている必要を神は根底からすべて満たしてくれるからです。そこにはたましいの回復、天国への入国、神との和解が含まれます。真のクリスチャンは、誠実にクリスチャンとしての生涯を全うして生きています。なぜなら、彼らは神の働きを為すことを心から喜びとし、それをしたいと願い求めているからです。真のクリスチャンは間違いなく永遠のいのちを受けます。それは自分たちが罪に気づき、キリストの召しに応答し、キリストのために働きをするからではなく、私たちの主人が私たちの想像をはるかに超えて恵み深い方だからです。

それゆえに皆さん、クリスチャンとして主に従って行く中で、私たちは様々なねたみや利己的な思いを捨てなければいけません。キリストの働きを為すに当たって、私たちは喜びに満ちた働きを為すことができるはずだからです。それゆえ、皆さんが主の働きを為すに当たって、この永遠の報いはクリスチャンであるからみな平等に受けることを覚え、神の恵みのゆえに与えられたこのいのちを喜びとして、主が与えてくださる働きを誠実に全うして行く、そのことを心から願います。